

翻訳：

イブン・アラビー著『叡智の台座』第9章

「ユースフの言における光の叡智の台座」翻訳

Japanese Translation of Ibn ‘Arabī’s *The Bezels of Wisdom (Fuṣūṣ al-ḥikam)*,
Chapter 9: “The Bezel of the Wisdom of the Light in the Word of Yūsuf”

相樂 悠太

Yuta SAGARA

I. 解題

本稿はイブン・アラビー (Muḥyī al-Dīn ibn ‘Arabī, d. 1240) の『叡智の台座』 (*Fuṣūṣ al-ḥikam*) 第9章の翻訳である。『叡智の台座』は『マッカ開扉』 (*al-Futūḥāt al-Makkīya*) と並ぶ彼の主著である。全 560 章の膨大な作である『マッカ開扉』に比べれば短篇であるが、著者の晩年に書かれた本書には『マッカ開扉』でも示された彼の主要な思想の多くが凝縮されている。本書の注釈を著すことはイブン・アラビーを祖とする「存在一性論学派」の伝統となり、カーシャーニー、カイサーリーといった重要な思想家たちに本書全体に対する注釈書がある。スーフイズム研究における第一級の重要性をもつ資料だといえる。

本章を貫く主題は想像力であり、想像力が神の顕現を認識するための能力としてイブン・アラビーの思想の中で重要な位置を占めることは Corbin 2012 や Chittick 1989 によって明らかにされた。本章ではまず想像力の中で現れる形象について述べられ、ムハンマドの啓示体験や章題にあるユースフの夢の物語が例示される。イブン・アラビーによれば、想像力の次元は抽象的な意味が感覚的な形象を帯びて現れる場であり、表面上の形象からその背後にある本質的な意味にたどり着くことが解釈の営為である。

本章ではつづいて物体と影の比喩を用いて神と宇宙の関係が説明されるが、光と影の象徴性は多義的であり、神を光の表象でとらえるならば、神の一性と神の顕現の多性の関係は、単一の光から多様な影が生じることに喩えて示される。また、影を落とす物体に対して影それ自体が実質をもたないように、被造物の世界すべてが想像的形象であることが主張される。一と多の相関の議論は神名論へと展開し、神の本体の宇宙からの独立性と、諸神名の宇宙への関与が対比されるが、この問題は本書の別の章でもしばしば言及される。

翻訳の底本には評価が高く、本書を扱うほとんどの研究者が依拠する Affifi の校訂版を使用した (Ibn ‘Arabī 1980b, 99-106)。訳出にあたり Austin, Dagli, Abrahamov の英訳、および本書の内容を分析した主な研究である Izutsu 1983 や Nettler 2003 を参考にした (Ibn ‘Arabī 1980a; Ibn ‘Arabī 2004;

Abrahamov 2015)。クルアーンの章句の訳出にあたっては、日本ムスリム協会の訳を参考にしたが、文脈に合わせて表現を変えた箇所もある。訳文中の訳者が補った部分は [] で囲んで示し、段落分けと節題は訳者による。

II. 翻訳

ユースフの言における光の叡智の台座

[夢とその解釈]

この光の叡智についていえば、その光は想像力 (khayāl) の次元に広がっていく。神慮の徒によれば、想像力とは神の啓示の第一の原理である。アーイシャ——神よ彼女を嘉したまえ——は「神の使徒——神よ彼に祝福と平安を与えたまえ——への啓示は真実の夢で始まり、彼はいつも、その夢が夜明けの光のように立ち現れるのを見るのだった」と語った。[つまり] その夢には不明瞭なところがない [ということである]。彼女が知りえたのはここまでである。使徒のこの [状態] は 6 ヶ月間続いたのち、天使 [ジブリール] が現れた。アーイシャは神の使徒——神よ彼に祝福と平安を与えたまえ——が「人間は眠っており、死んだときに目覚める」と言ったことを理解できなかった。眠っている状態で見るとすべてのものは、その様相はさまざまであれ、この [使徒が見たもの] と同種である。アーイシャは [使徒が夢を見ていた期間を] 6 ヶ月と言ったが、使徒の現世での全生涯がこれと同様に、眠りの中の夢 [のごときもの] にほかならないのである¹⁾。

[神から] 到来するものすべてがこれと同種であり、それらは想像の世界と呼ばれるものに属し、そのゆえに解釈の対象となる。すなわち、それ自体ではある姿をとる物事が別の姿をとって現れたならば、眠っている者が見たこの姿から、あるがままの姿をつかむことが解釈者にはできる。たとえば、知識が乳の姿で現れたとき、使徒は解釈 (ta'wīl) によって乳の姿から知識の姿を導き出した。このように彼は解釈し、「乳の姿は知識の姿に帰される」と言った。

使徒——神よ彼に祝福と平安を与えたまえ——は啓示を受けるとき、慣れ親しんだ感覚の対象物から引き離され、幕で覆われ [たように] 同席者たちから遠いところへ行ってしまう、啓示が途絶えると引き戻された。彼が眠っていたと言うことはできないが、彼が啓示を認識したのは想像力の次元においてである²⁾。同じように、天使 [ジブリール] が彼に対して人間の男の姿をとったのも、想像力の次元においてである。それは人間の男ではなく天使にほかならなかったのだが、人間の姿をとったのである。それを見た真知ある [使徒] は、解釈によってそ

¹⁾ ここで夢とは、根拠のない儚い幻想として消極的な意味で言われているのではなく、預言者ムハンマドは生涯のうち一定の期間ではなくそのすべてを通じて、啓示のように想像力に訴えかける認識を経験したことを言おうとしていると思われる。

²⁾ 預言者ならざる通常の間人も、眠りの中で夢を見るときに想像力の次元に参与するが、預言者の啓示の体験はむしろこれとは異なる。

の真実の姿にたどり着き、「これはあなたがたの宗教を教えにやってきたジブリールだ」と言った。使徒は人々に「あの男をわたしのところへ戻してくれ」とも言い、彼らに対して現れた姿のゆえに、それを男とも呼んだ。そして、想像化されたこの男の元の姿について「これはジブリールだ」と言った^③。使徒の言葉は両方とも正しい。感覚の目で見られたものについても正しく、「これはジブリールだ」ということについても、それは間違いなくジブリールなのだから、正しい。

ユースフ——彼に平安あれ——は「わたしは11の星と太陽と月がわたしに跪拝しているのを見ました」（Q 12:4）と言った。彼は兄たちを星々の姿で、父とおばを太陽と月の姿で見たのである。これはユースフの側のことであり、見られたものの側からすれば、彼の兄たちが星々の姿で、彼の父とおばが太陽と月の姿で現れるということは、彼らにとって望ましいことであった。[とはいえ]彼らはユースフが見たものを知らず、ユースフの認識は彼の想像力の宝物庫の中に[隠されて]いた。ユースフに見たものを告げられたとき、ヤアクーブはそれを理解し、「息子よ、おまえの夢を兄たちに話してはならない。さもないと彼らはおまえに対して策謀を企むだろう」（Q 12:5）と言った。そして自分の息子たちではなく、策謀の権化である悪魔にそれを帰し「本当に悪魔は人間には公然の敵である」（Q 12:5）と言った。つまり、[悪魔は]明白な敵意[をもつ]ということである。

のちにユースフはついに「これが往年のわたしの夢の解釈です。わが主は、それを真実になさいました」（Q 12:100）と言った^④。つまり、以前には想像の姿をとっていたものを感覚[の姿]で神が現したということである。しかし、預言者ムハンマド——神よ彼に祝福と平安を与えたまえ——は「人間は眠っている」と言った。したがって、ユースフの「わが主は、それを真実になさいました」という言葉は、眠りながら夢から覚めてその夢の解釈をする夢を見ている者[の言葉]に当たる。[このような者]は、自分の目がまだ眠っていることを知らないのであり、目覚めたならば「わたしはこんな夢を見た。すでに目が覚めているかのような夢を見ていて、[その中で]夢をこんなふうに解釈した」と言うだろう。ユースフの言葉もこれと同様である。

だがムハンマド——神よ彼に祝福と平安を与えたまえ——の認識と、最後に「これが往年のわたしの夢の解釈です。わが主は、それを真実になさいました」と言ったときのユースフ——彼に平安あれ——の認識のあいだにどれほど[の違いがある]か、よく考えなさい。ユースフが言ったのは感覚、つまり感覚の対象物のことである。想像力はつねに感覚の対象物しかもたらさないのだから、それは感覚の対象物に違いない^⑤。またムハンマド——神よ彼に祝福と平

^③「想像化された」姿とは想像力の次元において顕れる姿であり、ここでは真実の姿とは異なる、解釈を要する姿を指す。ジブリールに関するハディースについていえば、ジブリールが想像化された結果、人間の姿をとったという考え方になる。このハディースについてはMuslim 2004, 24-26を参照。

^④前の段落から引き続き、クルアーン 12章のユースフの物語をふまえており、この言葉はその物語の最後の場面で発せられる。

^⑤想像力の認識対象と感覚の認識対象には接点があると指摘することで、自らの夢を神が感覚の世界で実現したとするユースフの見解と、感覚の世界そのものが夢だとするムハンマドの見解に共通点

安を与えたまえ——の後継者たちの知がいかに崇高であるか、考えなさい。神が望むならば、この次元についてムハンマドの [知を共有する] ユースフが自分の言葉で語り、ムハンマドの後継者たちが知ることを説明しよう⁶⁾。

[宇宙は神の影である]

知りなさい。「神以外の一切」と言われるもの、あるいは宇宙と呼ばれるものは神との関係において、人物に対する影のごときのものである⁷⁾。それは神の影であり、宇宙に対する存在の関係に等しい。なぜならば、影はたしかに感覚にとって存在するものであるが、それは影を映し出すものがあるとき [だけ] であり、もし影を映し出すものがなければ、影は感覚にとって存在しない仮想のものとして、その影が関係づけられる人物の本体に潜在する [にとどまる]。

宇宙と呼ばれるこの神の影の現出の場は可能的存在者の実体 (a'yān) にほかならず、そこにこの影が広がる⁸⁾。神の本体の存在がこの場に広がる範囲で可能的存在者はこの影を認識する。認識が生じるのは「光」という神の名によってであるが、可能的存在者の実体に広がるこの影は見慣れぬ幽かな姿である。実に、あなたが見るように、一般に影は黒くなりがちであり、それは影と影の主たる人物のあいだの関係の隔たりのために、影が曖昧模糊としていることを示す。人物が白かったとしても、その影はこの通り [黒いの] である。

実に、あなたが見るように、遠くから見る山々は、それ自体では別の色であることを感覚が認識できるにもかかわらず、黒っぽく見えるが、その原因は距離にほかならない。また、空の青さも同様に、光を発しない物体に対する感覚のうちで、距離によって生じるものである。可能的存在者の実体も同様に、固定されてはいるが存在をもたない非在物であり、存在が光であるから、光を発しない [といえる] ⁹⁾。光を発する物体については、距離のために感覚の中で

を見出そうとしていると思われる。

⁶⁾ 「ムハンマド的」とここで訳した「ムハンマド的」(Muḥammadi) というユースフを形容する表現は、「預言者性の後継者」(wārith al-nubūwa) に関するイブン・アラビーの聖者論で用いられる。それによれば、聖者の中には特定の預言者の知を継承する者がおり、たとえば受難の生涯を送ったハッラージュは「イーサー的」(ʿĪsawī) だとされる。「ムハンマド的」と呼ばれるムハンマドの知的後継者たちは、聖者の中でも最も高い精神的地位を占める (Chodkiewicz 1993, 72-88)。ここではユースフがムハンマドに通じる認識を有することを示唆すると思われる。

⁷⁾ 「神以外の一切」と訳した原語は siwā al-Ḥaqq であるが、本章は al-Ḥaqq と Allāh の使い分けが深い意味をもつ文脈ではないと思われるため、両者を訳し分けず、両方を「神」と訳す。

⁸⁾ 可能的存在者の a'yān に関するイブン・アラビーの存在論はアアヤーン・サービタ (a'yān thābita) 論として知られる。アアヤーン・サービタは「不変的諸実体」(immutable entities), 「恒久的諸元型」(permanent archetypes), 「潜在的諸本質」(latent essences) などと訳され、神の知識の対象として存在化以前の状態にある宇宙の諸事物だとされる (Ibn 'Arabī 1980a; Izutsu 1983, 159-196; Chittick 1989, 83-88)。なお a'yān の語の基本的意味には「眼」、「見ること」もあり、この含意がイブン・アラビーの存在論で果たした役割について相樂 2023 で触れた。

⁹⁾ 「固定され」と訳した箇所では、アアヤーン・サービタの不変的・恒久的の性質を指す thubūt の語が使われている。光を発しない物体とは、光を発する太陽などの天体以外の物体を指すと思われる。ここでは存在が光であるとする見地から、非在者であるアアヤーン・サービタを、光を発しない物体になぞらえている。

小さくなるのであり、これは距離による別の影響である。それらを感覚は小さくとらえるが、それ自体ではより大きく、量も多い。たとえば、太陽は大地の 160 倍の大きさであることが証明されているが、感覚にとっては歯車くらいの大きさしかない。これも距離の影響である⁽¹⁰⁾。

影についてわかることしか、宇宙については知りえず、影の出所である人物についてはわからないように、神についても知りえない。神に影があるということはわかるが、影を広げる人物の姿は影それ自体からはわからないように、神については知りえない。このゆえに、神はある面では知られるが、ある面では知りえないとわれわれは言う。

「主がいかにか影を広げられたか、あなたは見なかったのか。もし彼がお望みならば、それを静止したままにされよう」(Q 25:45)。つまり、それを神のうちにとどめたままに、ということである。これは、神の影は存在のうちで実体が顕れていない可能的存在者のようであり、神は影を広げることで可能的存在者に対して顕現するということをいう。「それからわたしは、太陽をその証とした」(Q 25:45)。影は光がなければ生じないのだから、太陽とは先述した「光」という神の名のことであり、感覚がそれを目撃する⁽¹¹⁾。

「そしてわたしは、それをたやすく自分の方へ引き寄せる」(Q 25:46)。神が自分の方へ引き寄せるのは、それが自分の影だからにはかならない。それは神から生じ、すべて神のもとへと帰っていくのであり、神以外のものではない。われわれが認識する一切は、可能的存在者の実体のうちの神の存在である。神の彼性 (huwīya) からみれば、それは神の存在であり、その姿形の多様性からみれば、それは可能的存在者の実体である。姿形の多様性によってそれが影と呼ばれつづけるのと同じように、姿形の多様性によってそれは宇宙あるいは「神以外の一切」と呼ばれつづける。神は一者、唯一なる者であるから、それが影として一であることからみれば、それは神であるが、姿形の多性からみれば、それは宇宙である。わたしが説明したことを理解し、確信しなさい。

われわれが述べたことが正しければ、宇宙は真実の存在をもたない幻想であり、これが想像力の意味である。つまり、宇宙が神から離れた別のものとして独立するかのようにあなたは想

⁽¹⁰⁾ 直前の段落の後半部から引き続き、この段落も物体とその影の関係性を引き合いに出し、神の影である宇宙が神それ自体とはかけ離れた「見慣れぬ幽かな姿」であること理由を説明している。

⁽¹¹⁾ 『マッカ開扉』第 360 章「讃えるべき闇と明らかな光の階位の真知について」では人間のあらゆる認識は光によってのみ成立すると説かれる。すなわち、もしも光がなければ、知の対象も感覚の対象も、想像力の対象も全く何も認識されないのであり、一般の人々が人間の諸能力のために定めた様々な名は、真知者たちにとっては種々の認識を成り立たせる光の名だという。「あなたが聴覚の対象を認識するとき、あなたはこの光を聴覚と呼ぶ。あなたが視覚の対象を認識するとき、あなたはこの光を視覚と呼ぶ。あなたが触覚の対象を認識するとき、それによって認識がなされるところのこのものをあなたは触覚と呼ぶ。想像力の対象も同様である」と述べ、「嗅覚、味覚、想像力、記憶力、理性、思弁、形相化〔能力〕や、それによって認識が起こるあらゆるものは、光にはかならない」と述べる。認識対象が認識されるのは、認識者の認識を受けるための準備が認識対象それ自体にあるからであり、認識対象を光が照らし出すことで認識対象が認識され、認識者に対して顕れるとされる。この光をイブン・アラビーは神と同一視し、「あらゆる知の対象には神との関係がある。神は光である。ゆえにあらゆる知の対象には光との関係がある」と述べ、「神のほかには知の対象はない」とまで述べる (Ibn 'Arabī 2006, vol. 5, 408-409)。

像するが、事実はこちらと異なる。実に、感覚によってあなたが見るように、影は影を広げる人物とつながっており、いかなるものも自分自身から離れることはできないのだから、影がこのつながりから離れることはできない。だから知りなさい。あなた自身 [とは何か]、あなたとは誰か、あなたがあなたであるということはどのようなことか、あなたの神との関係はいかなるものか⁽¹²⁾。いかにしてあなたは神であり、またいかにして宇宙、「[神] 以外の一切」、[神] ならざるもの、あるいはこれらの言辞に類するものなのかを。この「認識」について知者たちには差異がある。だから知り、理解しなさい。

ガラスを通してくる光が、それ自体には色がないのにガラスの色になって見えるように、特定の影との関係において、神は小さかったり大きかったり、澄んでいたり、より澄んでいたりする。主に対するあなたの実相はこれに似ている。緑のガラスによって光が緑となったのだと言えば、それは正しく、実際に感覚が認めるところである。また光は緑色ではなく、光は色をもたないのだと論証に基づき言うならば、それも正しく、適正な論理的思考がそれを証する。ガラスが澄んでいれば、ガラスの影から広がる光は、光り輝く影となる⁽¹³⁾。このように、神についての確信をもつ者においては、他の者よりもはっきりと神の姿が浮かび上がる⁽¹⁴⁾。人間のうちには、神がその聴覚、視覚および諸能力と四肢の一切となった者がいることが、聖法によって告知知らされている。

それにもかかわらず、「その聴覚」(sam‘-hu) [という言葉] のうちの [「その」という] 代名詞がこの人物を表す以上は、影は存在する⁽¹⁵⁾。そして彼以外のしもべたちは彼と同様ではなく、このしもべは、他のしもべたちよりも神の存在と近い関係をもつのである。

[神の本体と諸神名の関係]

われわれの主張が正しいなら、次のことを知りなさい。あなたも、あなたがあなた以外のものとして認識している一切も、ともに想像 [の産物] であり、存在するものすべてが、想像力の中 [で作られた] 想像である。神の存在とは神そのものであり、これはとくに神の本体あるいは本質についてそうなのであり、諸神名についてはそうではない。なぜならば、諸神名が指し示すものには、名の対象 (musammā) としての神それ自体と、ある名 (ism) を別の名から区別し識別するための [意味の] 二つがあるからである。[たとえば] 「外なる方」(al-Zāhir) や 「内なる方」(al-Bātin) [という神名] のどこに「赦される方」(al-Ghafūr) [という神名] があるだろうか、「最後なる方」(al-Ākhir) のどこに「最初なる方」(al-Awwal) があるだろうか。い

⁽¹²⁾ 「あなた自身」と訳した原文は‘ayn-ka なので、「あなたの実体」とも訳せる。

⁽¹³⁾ 澄んだガラスを通った光ほど強い輝きをもつように、神の顕現の場たる被造物のうちにも、神的属性を反映する程度において差異がある。

⁽¹⁴⁾ 「神はアダムを自らの姿に創った」(khalaqa Allāh Ādam ‘alā sūrati-hi) というハディースが伝えるように、人間はみな潜在的に「神の姿」を有する存在として創られたが、神的属性を発現することで「神の姿」にどこまで近づけるかという点には個人差がある (Bukhārī 2004, vol. 4, 1112)。

⁽¹⁵⁾ 神がその諸能力となるという高度の境地に関するハディースの表現においても、「その」という代名詞によって神と被造物の区別が保たれている。

かにしてあらゆる神名が他の神名と同一であり、いかにして他の神名と異なるのか、いかにしてあらゆる神名が神と同一であり、いかにして神と異なる、われわれの面前の想像化された神であるのか、これでわかるであろう。

自分自身のほかに自分自身の根拠をもたず、自分自身によってのみ自分自身を確かとする方に讃えあれ。存在のうちには神の一性によって指し示されるもののみがあり、想像のうちには多性によって指し示されるもののみがある。多性に目を向ければ、そこには宇宙があり、諸神名があり、宇宙のさまざまな名がある。一性に目を向ければ、そこには諸世界から独立した神の本体がある。かくして、神は諸世界から独立する。諸〔神〕名は諸世界を指し示すだけでなく、別の名を指し示すのであり、このことによってそれらの名の結果が実現するのであるから、神は諸〔神〕名の諸世界への関係からの独立性そのものなのである⁽¹⁶⁾。

「言え、彼は神、一なるお方であられる」（Q 112:1）。これは神の本体についてである。われわれの神への依存については「神は自存され」（Q 112:2）[と言われ]、神の彼性とわれわれについては「生み出すことも生み出されることもない」（Q 112:3）、「彼に似たものは何もない」（Q 112:4）[と言われる]。これが神について形容されることであり、「神、一なるお方であられる」という言葉で神の本体の独一性が示され、神について[その他の]さまざまな形容がなされることによって多性が示される。われわれは生み出し、生み出される者であり、神に依存し、お互いに似通っているが、一なるお方である神はこれらの性質をもたず、われわれから独立するのと同じくこれらの性質から独立する。神に関わりがあるのは「純正」というこの章だけ[といえるほど]であり、そのことをこの章は啓示したのである⁽¹⁷⁾。われわれを求める諸神名にとっての神の一性とは、多性の一性であり、われわれからも諸神名からも独立した神[それ自体]の一性とは、本質的一性であり、この両方が「一なるお方」と呼ばれる。このことを知りなさい。

神がこの影を作り出し、左右に広げたのは、[それを]あなたと神を指し示すもの[とするため]にほかならず、それによってあなたが誰か、神に対するあなたの関係、あなたに対する神の関係はいかなるものかがあなたにわかるようにするためにほかならない。そして、「神以外的一切」が神に全面的に依存し、お互いにも依存しあうのはいかなる神的な真理によるのか、また神が人間や宇宙から独立し、宇宙の一部が別の一部に対して依存するだけでなくときに独立するのはいかなる神的な真理によるのかということが、あなたにわかるようにするためにほかならない。

宇宙は間違いなく本質的に諸原因に依拠しており、最大の原因は神である。宇宙が依拠する原因としての神は諸神名にほかならず、各々の名は自らに似た宇宙から依存されると同時に、絶対の神そのものである。このゆえに神は「人々よ、あなたがたは神に依存するしかない者で

⁽¹⁶⁾ 宇宙は諸神名の意味内容が発現する場であり、究極的には同一の神を指す諸神名は、互いに影響を与え合い、互いを指し示し合う。この多性の次元と、それを超越した神の本体が対比される。

⁽¹⁷⁾ 「純正」とはさきに引用されたクルアーン 112章の名である。

ある。神こそは、独立にして讚美すべき方である」(Q 35:15)と言った⁽¹⁸⁾。われわれがお互いに依存しあうのは明らかであり、諸神名も間違いなく神に依存するのだから、[依存するという点では]われわれの名はいと高き神の名でもあり、われわれは実際には神の影にほかならない。われわれは神と同じであり、同じでない (fa-huwa huwīya-nā lā huwīya-nā)。あなたの道はすでに作られたのだから、よく考えなさい。

謝辞：本稿は JSPS 科研費 JP21J00052 の助成を受けたものである。

参考文献

- Abrahamov, Binyamin 2015. *Ibn al-‘Arabī’s Fuṣūṣ al-Ḥikam: An Annotated Translation of “The Bezels of Wisdom,”* London: Routledge.
- Bukhārī, Muḥammad ibn Ismā‘īl al- 2004. *Ṣaḥīḥ al-Bukhārī*, 4 vols., Bayrūt: Dār Ṣādir.
- Chittick, William C. 1989. *The Sufi Path of Knowledge: Ibn al-‘Arabī’s Metaphysics of Imagination*, Albany: State University of New York Press.
- Chodkiewicz, Michel 1993. *Seal of the Saints: Prophethood and Sainthood in the Doctrine of Ibn ‘Arabī*, trans. by Liadain Sherrard, Cambridge: The Islamic Texts Society.
- Corbin, Henry 2012. *L’Imagination Créatrice dans le Soufisme d’Ibn ‘Arabī*, Paris: Entrelacs.
- Ibn ‘Arabī, Muḥyī al-Dīn 1980a. *The Bezels of Wisdom*, trans. by R. W. J. Austin, New York: Paulist Press.
- 1980b. *Fuṣūṣ al-ḥikam*, ed. by Abū al-‘Alā ‘Afīfī, Bayrūt: Dār al-Kitāb al-‘Arabī.
- 2004. *The Ringstones of Wisdom (Fuṣūṣ al-ḥikam)*, trans. by Caner K. Dagli, Chicago: Kazi Publications.
- 2006. *al-Futūḥāt al-Makkīya*, 9 vols., ed. by Aḥmad Shams al-Dīn, Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya.
- Izutsu, Toshihiko 1983. *Sufism and Taoism: A Comparative Study of Key Philosophical Concepts*, Tokyo: Iwanami Shoten.
- Muslim, Ibn Ḥajjāj al-Qushayrī 2004. *Ṣaḥīḥ Muslim*, al-Qāhira: Mu’assasa al-Mukhtār.
- Nettler, Ronald L. 2003. *Sufi Metaphysics and Qur’ānic Prophets: Ibn ‘Arabī’s Thought and Method in the Fuṣūṣ al-ḥikam*, Cambridge: Islamic Texts Society.
- 相樂悠太 2023. 「イブン・アラビーのアーヤーン・サービタ論再考」『宗教研究』別冊96, 166-167.

慶應義塾大学言語文化研究所兼任所員／

Institute Affiliate Staff of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies

⁽¹⁸⁾ この章句で人間は fuqarā’, 神は ghanī と呼ばれ、前者の語には「貧者」、後者の語には「富者」の意味もある。イブン・アラビーはこの章句を、人間の神に対する「依存性」(iftiqār) と神の「独立性」(ghanā’) を対比させる自身の議論の典拠とする。